

遙かなるザルツブルグ

——塩の城 ザルツブルグ——

遅いビジネスランチからオフィスに帰ってくると、机の上に郵便物の束が置いてある。その中に、ミネアポリス（米国ミネソタ州）のハムリ弁護士からの礼状があった。彼は知的財産専門のファームのパートナーである。

訪日に際しては、妻とわたしを歌舞伎とディナーに招待していただき有り難うございます。夜の付き合いを避けている矢部さんが、わたしたちと付き合っていただいたことに感謝します……。

夜の付き合いを避けているのは事実だが、誰からそのことを聞いたのだろう？苦笑いしながら、わたしは2年前彼の事務所を訪れた時のこと思いだした。

仕事の打ち合わせが終わった後、彼はわたしと同行の弁理士を「サウンド・オブ・ミュージック」に招待してくれた。分厚いステーキの食事つきのミュージカルである。いかにもアメリカ的だった。

ミュージカルの舞台はオーストリアのザルツブルグ。そういえば、昔妻と一緒に「塩の城」を訪れたものだった……。

オーストリアの北西、ドイツ国境に近いザルツブルグは、古くから塩の交易で栄えた（ザルツブルグは文字通り「塩の城」を意味する）。すでに紀元前7世紀から、ケルト人はアルプス山中の洞窟で岩塩を採掘していた。肉や食料品の保存に欠かせない塩は、古代から「白い宝石」として尊重された。塩は銀と同じ重さで取り引きされた貴重品だった。

人口14万人のこの小さな街は、雪を頂くアルプスの山並に囲まれ、美しく瀟洒な古都である。モーツアルトやカラヤンの出生地としても知られる。

かつてキリスト教が、1200年にわたってこの地方に強大な権力をふるった。ホーエンザルツブルグ城、ドーム（大聖堂）、ミラベル宮殿、レジデンツ（大司教の住居）など、現在の観光名所のほとんどは、大司教の富と権力の象徴であった。

ザルツブルグの見所は、なんといってもホーエンザルツブルグ城である。この古城は、ドイツ皇帝とローマ法王が争った時、法王側にたった大司教ゲープハルトが皇帝派の攻撃から街

を守るために建築した。メンヒスベルクの丘にそびえ、ザルツブルグ市内のどこからも眺めることができる。

——ミラベル宮殿のヒッピー——

街の北方に位置するミラベル宮殿は、17世紀の初め大司教ディートリッヒが、愛人サロメとその15人の子供のために建てた。ミラベルとは「美しい眺め」を意味するように、季節の色とりどりの花と緑と噴水が美しい華麗な宮殿である。

宮殿の絢爛たる大理石の広間では、シュロス・コンサート（宮廷コンサート）が開かれ、モーツアルト、ハイドン、シューマンなどの室内楽が定期的に演奏される。

宮殿の前には手入れの行き届いたミラベル庭園があり、ギリシャ神話をモチーフにした石像が並び、季節の花が幾何学模様に咲き乱れる。

思い出に浸っているうち、ふとわたしは脈絡もなく、2人の若者のことを見だした。

庭園の片隅に緑の小径があり、その小径の入口にヒッピー風の若者たちが、大きな布を地面に広げて座っていた。

2人とも20代後半。髪を長く後ろまで垂らしている。通り過ぎる観光客を相手に、イヤリングや腕輪などの安物のアクセサリーを売っていたが、誰も立ち止まりもしない。

わたし達が通りかかると2人のボソボソと話す声が聞こえた。

シケてるなー。こんなに売れないんじや、もっと安くしようか……。

思いがけず日本語だった。日本人だったのだ。わたしと妻はおどろいて顔を見合せたが、彼らはわたし達に気付かず話し続けていた。

あれからもう16年の時が流れた。彼らとは何の縁もないが、不思議なことにいまになって突然思い出した。あの若者達もいい中年の親父になっているだろうか。

——モーツアルトがいっぱい——

かつての塩の城もいまは音楽の都である。世界でこの街ほど音楽の溢れる街はない。

ドーム（大聖堂）では、6千本のパイプをもつヨーロッパ最大のパイプオルガンが鳴り響く。レジデンツ広場にはバロック風の噴水が吹き上げ旅情を慰める。州庁の鐘楼（グロッケンシュピール）は、1日3回7時、11時、18時にモーツアルトの音楽を奏でる。音楽祭で演奏されるモーツアルト、大噴水の水の音、鐘楼の鐘の音、教会のパイプオルガンの響き、この街は音楽に囲まれて生きてきたのだ。

この街にはモーツアルトが溢れている。「モーツアルトの生家」、7年間の青春時代を過ごした「モーツアルトの家」、モーツアルトの記念像が立つ「モーツアルト広場」、カラヤンも学んだ「モーツアルテウム」（音楽院）、モーツアルトの姉ナンネルの墓がある「聖ペーター教会」など。モーツアルトにちなんだ観光スポットに事欠かない。

春から夏にかけて催されるイースター音楽祭、聖靈降臨コンサート、ザルツブルグ音楽祭では勿論、モーツアルトの曲目が好まれる。

人形劇場は、1メートルほどの大きな操り人形で有名である。ここでも『魔笛』や『フィガロの結婚』などモーツアルトの出し物が演じられる。

話は脇道にそれる。この音楽の天才は、作曲に苦労したことがあったのだろうか？

天上から聞こえる音楽をそのまま楽譜に写しとったかのように、彼の作品は明るく、自由で、自然で、屈託がない。技巧に走るところがない。

ホルン協奏曲第1番、ピアノ・ソナタ第16番、第17番などを聴くと、仕事や生活のストレスも忘れる。心が軽やかになる。

「心に聖穏なし」とは、「とらわれ」や「こだわり」のない心の持ちようをいう。仏教の教えである。彼の音楽からは自由で穏やかな人物を想像するが、実際のモーツアルトは、品行も悪く、浪費癖があり、聖穏だらけだったらしい。いまは天才の名をほしいままにするモーツアルトも、若いときの賞賛と名声も長く続かず、死の直前は経済的にどん底にあった。彼は不遇のうちに35才の若さで死んだ。

—懐かしきサウンド・オブ・ミュージック—

人生は思い出の回転木馬、思い出はさらに思い出を呼ぶ。そういうえば妻はトラップ大佐の館をみて感激したものだった……。

小さな湖に面したトラップ大佐の白い館（レオポルド・クローン宮殿）は、ホーエンザルツブルグ城を背景にして、美しい姿を見せていた。マリアと子供達はこの湖で遊んだのだ。高校時代からサウンド・オブ・ミュージックのファンだった妻は、映画そっくりの白い瀟洒な宮殿を見て、なかなかその場を去ろうとしなかった。

やがて娘と息子が成長して物心がつくようになると、家族でサウンド・オブ・ミュージックのビデオを繰り返し楽しんだ。ナチスに追われたマリアとトラップ大佐がどうなるか、わたし達夫婦もハラハラ、ドキドキしたものだった。

その度に妻は、ザルツブルグの遠い思い出を子供達に得々と語った。マリアと子供達がドレミの歌を歌ったのがミラベル庭園の噴水。ナチの軍隊が行進していたところがドーム広場とレジデンツ広場。トラップ一家がナチの追跡を逃れるのを助けたのはノンベルク尼僧院の尼僧達。マリアとトラップ一家がナチへの抗議をこめて「エーデルワイス」を歌ったのが祝祭劇場……。

エーデルワイスよ
毎朝わたしに微笑みかける
愛らしく清らかに輝く
わたしに会えた喜びにあふれて
雪のように白い花よ
咲きほこれいつまでも
エーデルワイスよ
永遠に祖国を守っておくれ

こうしてザルツブルグの思い出は、思いがけず家族の団らんに役立った……。

ハムリ弁護士の手紙をきっかけに昔の思い出に浸っていると、電話が突然鳴って、ふとわたしは思い出から返った。後にわたしは彼に返事を書いた。

It was a pleasure for me to welcome you to Japan, and hopefully, return the wonderful hospitality you showed us during our visit to Minneapolis. I have many fond memories of the trip, especially of seeing "The Sound of Music" at the theater.

(来日の際はお会いできてよかったです。わたし達たちが、ミネアポリスで受けた歓迎の何分の1かでも、お返しえきれば嬉しいかぎりです。サウンド・オブ・ミュージックなど、ミネアポリスへの旅はたくさんの楽しい思い出でいっぱいです。)